

管の障害に起因する皮質骨の低栄養, 低酸素により惹起される骨変化であると推測された. この所見の放射線障害の predictor としての意義について考察する.

6 脊髄ヘルニアの一例

佐藤 晶・渡辺 雅人
野崎 洋明・河内 泉 (新潟大学)
辻 省次 (神経内科)

緩徐進行性の不全型 Brown-Sequard 症候群を呈し MRI が診断に有用であった特発性脊髄ヘルニアの症例を経験したので提示する.

症例は奇形・外傷歴のない53歳男性. 10年間の緩徐進行性の経過で右下肢の感覚異常と左下肢筋力低下を呈し神経内科を受診した. 神経学的には左下肢の MMT 4 レベルの筋力低下と左優位の両下肢深部腱反射亢進と病的反射を認め, 感覚系では右 Th10以下に温痛覚の低下を認めた. 後索症状は認めなかった. 脊髄 MRI では Th 4-5 レベルで脊髄が前方に屈曲・変位し硬膜前方に突出しており, 硬膜内の脊髄は萎縮性に認められた. 脊髄ヘルニアの診断で当院整形外科において Th 3-6 椎弓切除術, 脊髄還納・硬膜修復術を施行したところ症状・神経徴候の軽減を認めた.

従来, 特発性脊髄ヘルニアは極めて稀な疾患とされていたが, 1990 年以降 MRI の普及に伴い症例報告が増加し, これまでに34例が報告されている. 本例においても脊髄 MRI の特徴的な所見により診断に到ることができた. 従来報告例の約 80% が手術により症状の軽減を示しており, 本例でも術後症状の改善を認めたことから, 診断の意義は大きいと考えられる.

II. 特別講演

「新御三家時代の MRI」

新潟大学放射線科

岡本浩一郎

第44回新潟画像医学研究会

日時 平成12年11月18日(土)
午後2時～5時30分
会場 ホテルディアモント新潟
B1F

I. 一般演題

1 経静脈超音波造影剤による心筋コントラストエコー像と心筋シンチグラフィーとの比較の試み

榛沢 和彦・北村 昌也 (新潟大学)
諸 久永・林 純一 (第二外科)
中島 孝・福原 信義 (国立療養所犀潟病院)
神経内科

わが国でも超音波造影剤(レボピスト)の使用が認められ, 様々な領域の超音波検査に応用が始まっている. 特に造影剤を用いた各種臓器の perfusion imaging が注目されており, 心エコーにおいては心筋コントラストエコー法と呼ばれている. 心筋コントラストエコーはこれまで冠動脈に直接気泡等を注入して行っていたが, 超音波造影剤の登場で経静脈投与で行える極めて低侵襲な検査となった. またこれが行えるようになった背景にはエコー機器の発達に拠るところも大きく, 特に壊れやすい気泡を主体とするレボピストの使用では間欠送信によるフラッシュエコー法が不可欠である. 今回我々はレボピストを用いた心筋コントラストエコーを精神, 神経疾患患者で虚血性心疾患が疑われる患者に行い心筋シンチグラフィーとの比較を行った. その結果, パワードップラーを用いたフラッシュエコー法では心室瘤を伴うような明らかな虚血部位でよく一致したが, 軽度の虚血部位では一致しなかった. この原因としては心筋シンチでは細胞レベルの代謝を反映するのに対して心筋コントラストでは微小循環を反映していること, パワードップラーでは blooming を起こし易いことから軽度の病変が分からないことなどが考えられた. そこで現在はパワードップラーを用

いないグレースケールによる心筋コントラストについて検討中である。

2 本院における画像オーダーリングシステム(HIS・RIS・レポートニング)の構築と運用

木村 元政・荒井 誠
野口 栄吉・土橋 幸夫
大越 幸和・見田 勝子
小山ひろ子・熊倉 每美(新潟大学医学部附
山本 哲史・酒井 邦夫(属病院放射線部)
羽柴 正夫 (同 医療情報部)

平成11年度通常予算での病院情報システム(HIS; NEC)更新, 同CR更新に伴う放射線情報システム(RIS; 富士メディカル)の導入および補正予算での患者情報管理システム(含む放射線レポートシステム; 横河電機)導入により, 検査依頼から会計・診断報告書作成まで一連の画像オーダーリングシステムが構築され, 平成12年10月より運用が開始された。各々のシステムは別予算ではあったが, 仕様作成時期がほぼ一致していたため, 各システムの接続は比較的安価にできた。HIS画像オーダは医療情報運営委員会のワーキンググループが, RIS画像オーダは放射線部技師グループが, レポートシステムは放射線科画像診断医グループがそれぞれ担当した。導入に際して, 患者の流れは基本的に現行どおりにし混乱を避け, 利用者(依頼医師・受付・放射線技師・診断医)からの意見をできるだけ取り入れ, 院内合意を計ったため, ほぼスムーズに運用されている。

3 イレウスにて発症した小腸カルチノイドの一例

大井 博之・尾崎 利郎
松月 由子・伊藤 猛(長岡赤十字病院)
西原眞美子(放射線科)
佐藤 明人・広瀬 慎一(同 内科)
島影 尚弘・若桑 隆二
岡村 直孝・田島 健三(同 外科)

小腸カルチノイド腫瘍は欧米では最も高頻度な小腸悪性腫瘍であるが, 日本では小腸悪性腫瘍の2%を占めるに過ぎない稀な腫瘍である。他部位のカルチノイド腫瘍に比べ大きなものが多くイレ

ウス等の腹部症状, 転移を起こしやすく予後も不良である。

早期濃染を呈する粘膜下腫瘍で転移リンパ節が高率に認められる。本例も腫瘍周囲に濃染するリンパ節が指摘できた一例である。

4 肺癌小腸転移の一例

阿部 英輔・中川 範人(厚生連長岡中央総合)
塚田 博・佐藤 敏輝(病院放射線科)
稲田 勢介・富所 隆(同 内科)
大橋 泰博・吉川 時弘(同 外科)
相馬 孝博 (同 胸部外科)

症例は70歳男性。67歳時に肺腺癌と診断され右肺上葉切除術を受けた。術後より徐々に貧血が進行した。便潜血反応は陽性だったが出血部位を同定できず, 輸血にて対処していた。術後2年目の腹部CTにて小腸腫瘍が認められ, 腫瘍摘出術が行われた。腫瘍は単発性の低分化型腺癌で, 組織像が67歳時の肺腺癌と類似しており, 肺腺癌の小腸転移と考えられた。

小腸転移はCTや超音波で捕らえ難く予後は不良とされるが, 今回の症例のように単発性で比較的早期に発見された場合, 腫瘍摘出によって長期生存が期待できる。便潜血反応は消化管転移の比較的早期に陽性になることが多く, 出血部位が特定できない場合には小腸転移を念頭において検索を進めるべきと考える。

5 結節性硬化症に肺癌を合併した一例

中川 範人・阿部 英輔(厚生連長岡中央総合)
塚田 博・佐藤 敏輝(病院放射線科)
岩島 明 (同 内科)
相馬 孝博 (同 胸部外科)

結節性硬化症は, 腫瘍抑制遺伝子を有する9番染色体長腕, 16番染色体短腕の各連鎖によって多臓器に腫瘍性病変が生ずる疾患で肺病変としては, 一般にリンパ管筋腫症が挙げられる。

症例は, 検診で肺癌が見つかった51歳女性。特徴的な顔面皮疹, 多発する両腎血管筋脂肪腫, 側脳室上衣下結節を認め, 結節性硬化症と診断され